独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和４年度－

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

目次

1．外部評価委員会評価結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2．外部評価委員会評価報告

総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

博物館部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

研究所・センター部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

3．外部評価委員会委員名簿

外部評価委員会全体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

博物館部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

研究所・センター部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

令和4年度　独立行政法人国立文化財機構自己点検評価に対する外部評価委員会評価結果

中期目標大項目	中項目	小項目	自己点検評価	部会評価		総会評価		業務のまとまり
Ⅰ．国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	1．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	（1）有形文化財の収集・保管、次世代への継承	A	A		A		博物館
				小松	A	名児耶	A	
				浜田	A	小笠原	A	
				大久保	A	坂本	A	
				榊原	B	小松	A	
				出川	A	寺崎	A	
		（2）展覧事業	B	B		B		
				小松	B	名児耶	B	
				浜田	B	小笠原	A	
				大久保	B	坂本	B	
				榊原	B	小松	B	
				出川	B	寺崎	B	
		（3）教育・普及活動	B	B		B		
				小松	B	名児耶	B	
				浜田	B	小笠原	B	
				大久保	B	坂本	B	
				榊原	B	小松	B	
				出川	B	寺崎	B	
		（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	B	B		B		
				小松	B	名児耶	B	
				浜田	B	小笠原	B	
				大久保	B	坂本	B	
				榊原	B	小松	A	
				出川	B	寺崎	B	
		（5）国内外の博物館活動への寄与	B	B		B		
				小松	B	名児耶	B	
				浜田	B	小笠原	B	
				大久保	B	坂本	B	
				榊原	B	小松	B	
				出川	B	寺崎	B	
		（6）文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組	B	B		B		
				小松	B	名児耶	B	
				浜田	B	小笠原	B	
				大久保	B	坂本	B	
				榊原	B	小松	B	
				出川	B	寺崎	B	
	2．文化財及び海外の文化遺産保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施	（1）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	B	B		B		研究所・センター
				寺崎	B	名児耶	B	
				児島	B	小笠原	B	
				栗本	B	坂本	B	
				藤井	B	小松	A	
						寺崎	B	
		（2）科学技術を応用した研究開発の進展に向けた基盤的な研究	B	B		B		
				寺崎	B	名児耶	B	
				児島	B	小笠原	B	
				栗本	B	坂本	B	
				藤井	B	小松	A	
						寺崎	B	
		（3）文化遺産保護に関する国際協働	A	A		A		
				寺崎	B	名児耶	A	
				児島	A	小笠原	A	
				栗本	A	坂本	A	
				藤井	A	小松	A	
						寺崎	A	
		（4）文化財に関する情報資料の収集・整備に関する調査研究成果の公開・活用	A（外部評価委員会評価を反映）	A		A		
				寺崎	A	名児耶	A	
				児島	B	小笠原	A	
				栗本	A	坂本	B	
				藤井	B	小松	B	
						寺崎	A	
		（5）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	B	B		B		
				寺崎	B	名児耶	B	
				児島	B	小笠原	B	
				栗本	B	坂本	B	
				藤井	B	小松	B	
						寺崎	B	
		（6）文化財防災に関する取組	B	B		B		
				寺崎	B	名児耶	B	
				児島	B	小笠原	A	
				栗本	B	坂本	B	
				藤井	B	小松	B	
						寺崎	B	
Ⅱ．業務運営の効率化に関する事項			B	—	—	B		法人共通
						名児耶	B	
						小笠原	B	
						坂本	B	
						小松	B	
						寺崎	B	
Ⅲ．財務内容の改善に関する事項			B	—	—	B		
						名児耶	B	
						小笠原	A	
						坂本	B	
						小松	B	
						寺崎	B	
Ⅳ．予算、収支計画及び資金計画			B	—	—	B		
						名児耶	B	
						小笠原	B	
						坂本	B	
						小松	B	
						寺崎	B	
Ⅴ．その他事項			B	—	—	B		
						名児耶	B	
						小笠原	B	
						坂本	B	
						小松	B	
						寺崎	B	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和４年度－

総会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（総会）
まとめ

〔博物館業務〕

１．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

（１）有形文化財の収集・保管、次代への継承

自己点検評価　Ａ　　委員会評価　Ａ

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	全体として順調に活動成果をあげていると思われる。さらに、それらの有益な活用に力を注がれることを期待する。
小笠原委員	A	個別項目のＡの数は少ない（３／１９）ように見受けられるが、部会評価書に記載の質的な評価を尊重して、収集・寄贈が根気を要し、容易でないことにも鑑みて、Ａ評価としたい。
坂本委員	A	部会では一部委員からＢ評価がありましたが、件数およびその希少性などを鑑み、自己点検評価のＡを支持します。
小松委員	A	各館とも、重要な作品の購入、受託に注力し、成果をあげている。また、作品の保存・修復の面においても、新しい技術が導入されて効果をあげており、今後もこの分野の充実が期待される。
寺崎委員	A	―

（２）展覧事業

自己点検評価　Ｂ　　委員会評価　Ｂ

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	毎回感じることだが、見せ方の工夫など特別展への取り組みは安定しているようだが、入館者数の多さを目標にするだけでは無く、少しずつ力を入れているようだが、蔵品を活かした自主企画も増やすと良いと思う。
小笠原委員	A	国民や訪日外国人からみた日本文化への関心や接点を考えると当該事業の集客による発信は非常に重要視すべきものである。来館者数の見積もりは容易ではないし、精度を上げることは困難であるものの、当該見積もりの目標来館者数を大きく上回る特別展が多く、全体として特別展は年間で前年比 20%増であること、平常展が同じく 2.5 倍に増えていることを考えると、満足度も高いことも踏まえ、Ａ評価が妥当であると思われる。なお、個々の特別展に関してもＳ評価に匹敵するものが「150 年後の国宝展」以外にも複数あったものと評価している。
坂本委員	B	メディアと共催する特別展以外に、京博の 10 年ぶりの自主予算企画「観心寺と金剛寺」や東博の「150 年後の国宝展」など、意欲的な事業展開をされました。こうした出色の企画は、資金調達の新しい手法と組み合わせることで、課題や批判を乗り超えることも可能です。たとえば①繁閑に応じたダイナミックプライシング、②クラウドファンディングのさらなる活用、③館内を歩いた歩数でポイント付与など、今後も未来への挑戦を続けていただきたいと考えます。
小松委員	B	令和 2 年度、3 年度とコロナ禍で入場者数が激減していたが、4 年度になってようやく回復しつつあるようにみえる。今後は、特別展に偏重することなく、平常展を中心とした地道な活動を継続して、博物館を長期的にサポートしてくれるような観客を増やす施策がより必要になっていくのではないか。
寺崎委員	B	―

（3）教育・普及活動		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	他にも意見にもあるように、青少年向けの事業も増えているようで、活動が安定していると思われるが、これから先の美術館、博物館活動を考えると、さらに若年層や若者層に対する取り組みが重要と考えられ、もっと積極的な活動を期待する。
小笠原委員	B	自己評価、部会評価に同意見である。
坂本委員	B	オンラインを活用したギャラリートークを時々拝見しています。学校との連携も重要ですが、若い世代との接点としてSNSのさらなる活用を期待します。
小松委員	B	各館とも入場者の多くは中・高年層であり、若年層をどのようにして取り込むかは喫緊の課題である。各館ともそれぞれに策を講じているようだが、一過性のものではなく、九博の「あじっぱ」のようなスペースを恒常的に確保して、次世代の観客を増やす努力をしていく必要があるのではないか。
寺崎委員	B	―

（4）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	各館の活動報告から、調査研究活動が多岐にわたって成果を上げたと感じられる。こうした取り組みが将来の博物館の存在意義を強めることにつながることと思われ、継続を期待する。
小笠原委員	B	特別展「河内長野の霊地観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産」の調査研究や「南都の古代・中世の彫刻」に関する調査研究など特筆すべきものがあった。調査研究→展覧会という流れは今後もぜひ継続していただきたい。また、「はっけん！ほとけたちのかたち」の教育普及プログラムは、参加したが、大人も楽しめる日本の仏教及び仏教彫刻を知る素晴らしい企画展であったことを付言したい。
坂本委員	B	「みほとけ調査」がグッドデザイン賞を受賞、８ｋ文化財プロジェクトが日本賞最優秀賞を受賞など、最先端の科学技術と文化財を掛け合わせることで幅広く社会にアピールできる機会が広がります。これらの成果を多くの方に見ていただけるようさらなるご尽力をお願いいたします。
小松委員	A	博物館業務の基幹となるのは調査･研究活動である。その点からいえば、地道な作品調査が展覧会に結びついた事例がいくつも報告されているのは心強い。また、文化財の保存・修復の面でも新しい技術の研究が進んでおり、さらなる進展が期待される。
寺崎委員	B	―

（5）国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	文化財活用センターの活動も次第に認知され、オンラインの活用も有効になっていることも確認でき、博物館活動への寄与を評価できる。
小笠原委員	B	コロナ禍において制限される中、目標通りの成果を国内外においてあげたものと考える。
坂本委員	B	新型コロナ感染症が落ち着きを見せてきたこともあり、国内外博物館への収蔵品貸与など数字が回復してきており、Ｂといたしました。

小松委員	B	コロナ禍の状況下においても、貸与であるとか援助、助言の件数が減っていない点は注目される。機構４館は、日本美術の分野では国の内外を問わず、指導的な役割を担うことが期待されており、今後もその期待に応えられるような活動を継続していってほしい。
寺崎委員	B	―

（６）文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	データベースの充実をはじめ、文化財活用センター中心の活動が認知され、「e 国宝」へのアクセス増加の例のように、目標を達していることが確認できる。
小笠原委員	B	「未来の博物館」には様々な創意工夫がみられること、またデジタルアーカーブジャパンアワードの受賞も将来を考えると非常に意義のある目を見張る成果であるものと考える。
坂本委員	B	文化財活用センターが多方面で活躍されていることが理解できました。文化財継承を文化行政の中だけで実現するのは難しいですから、広い視座を持ち、ネットワークを駆使して活動してください。
小松委員	B	東博で開催された「未来の博物館」が画期的な試みだったと思う。日本の美術品は、概ねケース越しでしか鑑賞できないので、今後、さまざまな映像技術を駆使して、より美術品に親しんでもらう方策が必要になるだろう。また、ColBase の件数も飛躍的に伸びているようだが、今後、さらなる充実が期待される。
寺崎委員	B	―

〔研究所・センター業務〕		
２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
（１）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	各施設での調査研究は、着実に成果をあげていることが確認できる。こうした新しい知見等の成果を広く認知されるための工夫もこれからは必要になるかと思われる。
小笠原委員	B	24 項目中７つのＡはどれも素晴らしい調査研究であると思われる。今後も無形文化財及び無形民俗文化財等に関する調査研究を深めていただきたいと同時に、古代の平城宮や藤原宮、飛鳥地域の調査研究は、古代史を解明し、中国から伝来した土木技術や政治制度、仏教文化を知る貴重な財産ともいえるので、継続調査をお願いしたい。
坂本委員	B	とりわけ無形民俗文化財の継承について各地で厳しい状況にあるようです。少子高齢化による継承者不足に加えて、コロナ禍による中断・休止と、かなり危機的な状況にあることをしばしば耳にします。取り組みをさらに加速させていただけるよう期待しています。
小松委員	A	これまで科学的な調査に遅れがみられた近・現代美術の分野で、進展があったことはおおいに評価できる。今後、さらに対象を広げて体系的な調査がおこなわれることを期待したい。
寺崎委員	B	―

（２）科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	さまざまな研究の成果は安定している。科学技術の応用も重要だが、長年積み重ねられてきた、従来の文化財保存をはじめとする過去の知恵への取り組みも重視した方がよいと思う。
小笠原委員	B	昨年のＡ評価となんら劣るものはないと考えたものの、昨年を受けより目標のバーが上がったものと思料して、Ｂ評価とした。しかしながらモニタリング指標としての論文数や報告書の刊行数も確実な成果を上げたものと考える。
坂本委員	B	光学的調査や電気的脱塩法など毎年、科学的な手法による成果が着実に蓄積されており、時代を超えて研究が発展していることが理解できます。
小松委員	A	近年、さまざまな文化財について科学的な調査がなされており、作品の制作当初の形を明らかにし、また、作品保全の方向性を探るなど、いくつもの面で大きな成果をあげている。今後も、さらに新しい技術を開発するなどして、この方面に注力していってほしい。
寺崎委員	B	―

（３）文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価　A　　委員会評価　A		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	着実に活動が実施され、評価通りで良いと思う。
小笠原委員	A	特にアジア諸国等文化遺産保存修復協力において、シンポジウムの開催も含めて特筆すべき成果があったものと考える。今後もリーダーシップを発揮して、当該取り組みの推進を図っていただきたい。
坂本委員	A	部会報告によりますとＢ評価の委員が１名いらっしゃいました。個別事業におけるＢ評価が多いことが理由とのことで、確かにその通りではありますが、他委員３名がＡ評価とされておられることから、全体評価としてもＡといたします。
小松委員	A	コロナ禍によって停滞を余儀なくされていた事業がようやく再開され、おおきな成果をあげているようにみえる。今後のさらなる充実が期待される。
寺崎委員	A	―

（４）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価　B　　委員会評価　A		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	A	記念事業での特別展等、全体に目標を超える成果が上がったという委員の意見の通りと判断できる。
小笠原委員	A	文化財に関するデータベースを充実したことで、前年比１８％閲覧数も伸びている「文化財総覧ＷｅｂＧＩＳ」がデジタルアーカイブ学会　学会賞を獲得したことは目覚ましいことであり、また研究成果公開施設である平城宮跡、藤原宮跡、飛鳥の各資料館の来館者数が前年比 1.5 倍以上になっている点も高く評価すべきものである。したがって、Ａ評価としたい。
坂本委員	B	部会評価はＡ。４名の委員のうち２名が自己評価を上回る上位評価をされておられました。個別の研究・取り組みを拝見したところ、着実に進展してはいるものの、世の中全体の急速な変化と比較すると、さらなるスピード感がほしいと感じます。自己評価を尊重してＢとさせていただきます。

小松委員	B	厖大な数の文化財をデータベースとして整備していくことは、文化財機構の大きな役割の一つだと思う。現状では考古部門が中心となっているようだが、今後、美術・工芸の分野でも整備が進んでいくよう期待したい。
寺崎委員	A	部会の４委員のうち、２委員より「A」評価とすべきだという意見が出され、総合的に判断した結果、部会評価を「A」とした。これまでの文化財データベースの充実、専門的アーカイブの拡充に加え、各種の企画展示と図録刊行、公式ツイッターでの情報発信など、大きな成果が得られたものと考える。

（５）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

自己点検評価　B　　委員会評価　B

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	それぞれの研究所の活動は、報告書通り着実に成果を上げている。
小笠原委員	B	自己評価、部会評価と同意見である。
坂本委員	B	コロナ禍のもたらした数少ないプラス面としては、全国各地とオンラインで即座につながる経験を広く共有できた点であると思います。今後もその効用を生かして地方公共団体等との連携を深めてください。
小松委員	B	文化財に関わる研究者、職員の知識、経験などにはばらつきがあるのが現状であり、全体的な水準の底上げが必要と考えられる。その意味で、東文研、奈文研がおこなっている研修、指導は重要であり、今後とも、この方面に注力していく必要があるだろう。
寺崎委員	B	―

（６）文化財防災に関する取組

自己点検評価　B　　委員会評価　B

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	概ね目標通りの成果を上げていると判断できる。
小笠原委員	A	５項目中２項目がAであり、定量的に充足すべきものであるし、初の出展となった「ぼうさいこくたい」への参加における普及啓発の取り組みやコロナ禍によるシンポジウム・講演会の５回開催、文化財防災救援基金の設立など、今後に期待したい内容が多いため、その期待もこめてA評価としたい。
坂本委員	B	文化財防災センターの活動は重要です。令和５年度には最初の成果発表が予定されているとのこと。文化財防災救援基金の拡大も含めて期待しています。
小松委員	B	防災に関する取り組みでは、まだ地域によって温度差がみられるように思う。今後、全国的に防災に関する意識を高めていく必要があり、その点で文化財機構が果たすべき役割は大きいと思われる。
寺崎委員	B	―

〔法人共通業務〕

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価　B　　委員会評価　B

委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	着実に効率化が実施されており、自己点検評価通りと思われる。
小笠原委員	B	一般管理費を効率化したこと、また光熱費の伸びを抑える努力も奏功している点は評価したい。一方業務の電子化、ＤＸ化については、今後も推進することで、より効率化に努めていただきたい。

坂本委員	B	光熱費の高騰など避けがたい影響も大きいと思いますが、しっかりと運営されていると評価できます。
小松委員	B	一般管理費、業務経費ともに節約の効果があがっていると思われる。省エネに関しては、開館している限り削減は困難だが、引き続き努力を続けていってほしい。
寺崎委員	B	―

Ⅲ　財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	所定の目標を確実に達成していると思われる。さまざま工夫が見られる。
小笠原委員	A	自己収入額が前期比及び予算比で大きく上回っていること、外部資金も寄付金増加が寄与して、前年を2億以上上回っていること、保有資産の有効活用についても前年と比べても著しい成果があること、などから、一般に支出するより収入を得ることがいかに大変であるかを勘案すれば、達成率120%超の十分な成果があったものと思料する。
坂本委員	B	ファンドレイジング勉強会を法人内に立ち上げるなど、意欲的な取り組みが目立ちます。保有資産の活用にも力を入れておられることが実績値の伸びからわかります。
小松委員	B	業務の効率化、電子化については、民間企業においてもさまざまな試みがなされている。文化財機構においても、それらの成果を取り入れることによって、さらなる効率化の促進をはかる必要がある。また、外部資金の導入、施設の目的外使用などの面にも注力し、さらに収入があがるような方策を練っていってほしい。
寺崎委員	B	―

Ⅳ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	収支計画、資金計画等も概ね計画通り実施されている。光熱費の値上がり等、種々の条件の変化に対する対応への工夫も実施されている。
小笠原委員	B	年度を通じて安定した収支実績（資金調達運用実績）を残したものと考える。
坂本委員	B	機構の性質上、一般企業で行われているような目標設定や、目標達成のためのPDCAはなかなかなじみにくいと理解していますが、世間一般から見た際によりわかりやすい形を模索していただければと考えます。
小松委員	B	国内外の展示施設を見渡しても、収入が支出を上回るといった例は極めて少なく、現状で文化財機構の各館が運営費交付金に依存した経営をおこなっているのはやむを得ないことと考える。しかしながら、自助努力は不可欠であり、今後は、23パーセント程度にとどまっている展示事業等収入をいかに増やしていくか、さまざまな手立てを考えていく必要があるだろう。
寺崎委員	B	―

Ⅴ　その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価　B　　委員会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 委員長	B	全体に、経費節減、効率化等の努力が見られるが、これからの博物館を考えると、若年、青年層の博物館、文化財への理解を深める必要がある。現在の高年齢層を頼りにした展示活動では先行きが危ういであろう。少しずつ増えている若者への対応を充実させるためにも普及活動確保のための予算拡充は不可欠と思われる。若者を育てれば、10 年後には新しい博物館活動生まれるはずで、そこへの投資は最も効率的ではないかと思われる。
小笠原委員	B	内部統制についても各組織のトップのリーダーシップのもと堅実に行われている。また必要な人財の獲得も機動的に行われている。
坂本委員	B	限られた要員のなかで攻めと守りの両面でご尽力されておられることが今年のご報告からも伺えました。失敗を恐れず、多様性を追求してください。
小松委員	B	研究系職員についてのコメントになるが、年を経るごとにその業務量は増していく傾向にあると思われる。アソシエートフェローの採用などによってマンパワーの不足を補っているというが、やはり人材の育成、業務の継続性などの観点からすれば、優秀な常勤職員を増やしていく必要があり、その点に留意して採用計画を立ててほしい。
寺崎委員	B	―

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
名児耶 委員長	概ね、目標を達成していることが確認できるが、さらなる活動の発展継続も望みたい。この先の博物館活動を確保するための予算の充実も不可欠であろうと思う。
小笠原委員	コロナが十分に収束しきれていない本事業年度において、感染防止の各規制や従前からの事業に関わる各種規制及び政策のなかで、各博物館及び各文化財研究所において、創意工夫をされて、運営に努力されていることは十分に評価すべきものである。全体として最終評価時点がコロナ明けで謙虚な評価となっているようであるが、量的にも質的にもご尽力された事業年度であると思料する。 なお今後は評価上、目標設定が必須であるため定量化できるものはあらかじめ設定していくことも検討いただきたい（例、文化財防災のシンポジウム開催回数、保有資産の有効活用の推進に関する自己収入、機構内の新規・中途人財の採用予定など。）
坂本委員	いまだコロナ禍の影響を大きく受けながらも、博物館および研究所・センターの両業務とも創意工夫を凝らし、新しい取り組みに挑みながら成果を挙げておられることを評価します。 新聞社経験者として申し上げると、博物館業務も研究所・センター業務も、もっとメディア（既存メディアだけでなくデジタルメディアを含む）を活用して広報活動できる余地があると思います。おもしろい企画や成果をトピックとしてわかりやすく発信することで、記事やニュースとして取り上げられる機会は確実に増えます。ＳＮＳの導入と並行して、立体的な周知活動につなげていただけることをお勧めします。
小松委員	コロナ禍や予算面での制約がありながら、多岐にわたる事業を限られた人員で効率的かつ効果的に実施していると評価することができる。今後も有意義な展覧会事業、調査研究活動を通じて、わが国の文化事業に指導的な役割を果たしていくことが期待される。
寺崎委員	・猖獗をきわめたコロナの影響がようやく下降し、様々な活動が復活しつつある１年となった。各機関とも、幅広い分野で調査研究・教育普及活動等を、計画的かつ着実に展開しているものと考え、その成果は高く評価される。関係者の尽力に敬意を表したい。 ・全体として、所期の目標を十分に達成していると考える。個別の評価については、博物館業務及び法人共通業務に関しては、特に異論はない。研究所・センター業務については、（４）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用の評価を、部会評価にしたがって「A」とした。

	・総会における研究所・センター部会報告の最後に、次のように述べた。 「2018 年までは、総会の場に外部評価委員全員の出席が求められ、部会の枠を超えて意見の交換ができたが、翌年から、総会への出席は部会長のみとなった。本来的には以前の方式の方が望ましく、総会の開催方式を再度、検討してもらいたい旨の意見が、部会で複数の委員から出された」と。 　その後、事務局からメールで前回変更された際の経緯を説明いただいた。それによって初めて知った点もあるが、2019 年総会での変更が大幅かつ唐突であったという点は、当時の柳林委員の発言（『平成 30 年度独立行政法人国立文化財機構年報』546 頁）の通りであろう。外部評価委員会のあり方として、当時の改革が良い方向だったのか、さらなる改良点はないのか、常に検討する必要があると思われる。 　総会に外部評価委員全員の参加を求め、その場で議論することが難しいということであれば、たとえば、総会は現在の方式のままとしても、外部評価委員全員に「自己点検評価報告書」を送付し、自由記述でコメントを求める、といったことがあっても良いのではなかろうか。たまたま部会長を拝命している小生よりも、はるかに博物館業務や法人共通業務に精通している部会委員がおられるのに、その意見がどこにも反映されないのはいかにも残念だ、と考えるからである。 ・去る３月 29 日、寺田吉孝委員（研究所・センター部会、副部会長）が逝去された。謹んでお悔やみ申し上げます。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和４年度－

博物館部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（博物館部会）まとめ

自己点検評価　B　　部会評価　B

1．有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
（1）有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価　A　　部会評価　A		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	A	いずれの館においても作品の受贈・受託を積極的に進めているようすがうかがえる。貴重な美術品は、適切な環境で保管されていくことが望ましく、その意味で今後も機構各館が大きな役割を果たしていくことが期待されるだろう。また、有効活用できる文化財を増やすという意味では、作品の修復も重要な事業である。各館とも修復工房を整備するなど、こちらも以前に較べれば格段の進展がみられるように思う。
浜田 副部会長	A	堅実に業務が推進され、各館員の努力が感じられる。引き続き、資料収集と保存のための十分な予算確保に努められたい。
大久保 委員	A	国立機関ならではの質の高く、かつ美術史的に意義のある作品購入がおこなわれており、今後もそれを維持・拡充していってほしい。文化財の修理に関しては、その重要性を社会に周知し、外部資金や寄付金などの活用をさらに進めていってほしい。
榊原委員	B	各館それぞれ収集方針に従い、優れた作品資料収集の実を上げた。また寄贈寄託品も多く、これは長年に及ぶ各館の活動が所蔵家の信頼と理解を得た結果に他ならず今後とも寄託品の充実に努めるべきだろう。収集には限りがない。さらなる活動の活発化と充実を期待する意を込めて評価した。
出川委員	A	国立博物館として文化財の修理やそれに伴う研究などの活動を高く評価したいと思います。

（2）展覧事業		
自己点検評価　B　　部会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	コロナ禍が一応終熄し、各館とも入場者数が増加しつつあるようにみえる。今後は、今回の経験を活かして、適切な展観環境とはどのようなものか、また、どうすれば無理なく入場料収入を増やしていけるのか、それぞれに模索していく必要があるだろう。また、会議の席上でメディアと共催する特別展が偏重され、自主企画展の試みがおろそかになっているのではないかとの指摘があった。自主企画展の実施については、予算の手当、マンパワーの確保などさまざまな課題を克服しなくてはならないが、これを実施することにより、各展示施設において展覧会を企画する力、館そのものの魅力を発信する力などが向上すると思われる。今後、各館においては、自主企画展の実施に向けて、積極的に方策を練ってほしいと思う。
浜田 副部会長	B	館制限が徐々に緩和されつつあるが、入館者数や収益等の回復には、まだ時間がかかるものと思われる。そうした中で、東京国立博物館で開催された開館150周年記念「国宝展」が、予想を大幅に上回る438.9%という入館者を得たことは特筆事項と言える。「150年後の国宝展」も大変良い視点であった。
大久保 委員	B	特定の寺院に関わる文化財の公開など、周到な調査活動をもとにした学術的に高い意義を有する展覧会活動が行えている。「国宝 東京国立博物館のすべて」展に関してはその企画内容に批判的な世論もあったが、150周年という節目に当たっての企画と考えれば理解できる。

榊原委員	B	周年記念や遠忌にちなむ展覧会は、規模・内容ともに大きく、それを担えるのは国立博物館の、それも複数館の連携以外にないと考えるのは自然だろうが、それにしてもそうした巡回展が多過ぎるのではないか。今後ともこうした傾向は強まりそうなので敢えて苦言を呈したい。各館、日ごろの調査・研究を展示に結びつけた優れた展覧会を開催しているだけに、そうした展示への応援の意を込めて一言述べておきたい。
出川委員	B	展覧会の内容も充実し、展示技術などの作品の見せ方の面においても優れたものがあり、各館の展覧会について高く評価します。

（３）教育・普及活動

自己点検評価　B　　部会評価　B

委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	各館とも多種多様な施策をおこなっていると評価することができる。なかでも注目されるのは、東博における多数回のオンラインギャラリートークや九博における YouTube を活用した動画配信などであり、コロナ禍が終熄したとしても、今後、このような形で多くに人々と交流を図り、展示施設への興味を繋いでいくことは必要になると思われる。また、各館においてキャンパスメンバーズ、スクールプログラムなど、青少年向けの事業が積極的におこなわれている点も心強い。次世代の博物館・美術館愛好者を増やしていくことは重要な施策であり、引き続きの努力の傾注が期待される。
浜田 副部会長	B	3 年度まで、オンライン事業が中心であったが、4 年度からは一部で対面事業が復活し、利用者からすれば喜ばしい事業展開となった。平時の活動に戻る日を心待ちにしたい。
大久保 委員	B	多様なメディアや最新のシステムを積極的に活用し、展覧会に関わるものに限定されない、広範で深みのある普及活動をおこなっている。
榊原委員	B	各館、小・中・高、学校教育との連携が図られている点、大いに評価したい。またこうした教育普及活動は、地方の美術館・博物館の範ともなるもので、そのプログラム内容や問題点、成果など広く公開して欲しい。
出川委員	B	さまざまな工夫を凝らしながら、コロナ禍等で困難ななか事業を推進され、所期の目標を達成されていると思います。

（４）有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究

自己点検評価　B　部会評価　B

委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	コロナ禍によって活動が制約されるなかで、各館とも多岐にわたる調査研究活動がおこなわれてきたと評価することができる。とくに京博で開催された「河内長野の霊地 観心寺と金剛寺―真言密教と南朝の遺産―」展は、地道な調査研究の成果が展覧会の形で示されたもので、展示施設における調査研究の重要性を如実に示したものということができるだろう。また、九博を中心に IPM などをテーマとした調査研究活動がおこなわれている点にも注目したい。作品の保存・修復などを主な研究課題とする博物館科学は、わが国では未だに発展途上の分野であり、機構各館においては、より積極的な調査研究活動への取り組みが期待される。
浜田 副部会長	B	京都国立博物館において、10 年ぶりに自主予算による特別展が開催されたと聞き、持ち込みや協賛による特別展が主流をなしている事実を知った。展示のための自主予算の充実を切に願いたい。 8K による「みほとけ調査」での「2022 年度グッドデザイン賞」の受賞並びに、「8K 文化財プロジェクト」の国際コンクール日本賞おける「デジタルメディア部門最優秀賞（経済産業大臣賞）」の受賞は特筆事項と言えよう。
大久保 委員	B	展覧会活動に関わる調査研究だけではなく、科研費などを活用した館員個々の研究活動およびその成果発表も博物館活動のための基礎体力を向上させるための重要な要素であるので、機構全体として支援していく体制が望まれる。

榊原委員	B	博物館の活動というと、ともすれば展覧会に目がいってしまうのだが、日常的な調査研究こそは博物館の最も重要な仕事であるはずで、それがあればこそ優れた展覧会も可能となる。各館それぞれ科研費や学術研究助成基金など外部資金を利用しつつ活発な調査研究が行われており評価するとともに今後の更なる研究の進展を期待する。
出川委員	B	「五馬図巻」の数年にわたる修理調査報告書や各館の特別展の図録掲載論文などに優れた研究成果が反映され、機構としての調査研究の役割を十分はたされていると思います。

（５）国内外の博物館活動への寄与

自己点検評価　B　　部会評価　B

委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	感染症が蔓延するなかで、海外との交流事業も大きな影響を受けているが、それでも各館ともリモートなどを活用して会議や研究発表をおこなっているようすがうかがえる。これを契機にして、オンラインによる交流がさらに深まれば、お互いにおおきな成果を得られるのではないか。また、コロナ禍の状況においても、国内でさまざまな展覧会が開催され、機構４館がそれらの事業を支援していることが報告書から読み取れる。今後とも、作品の貸与にとどまらず、文化財の保全、展示、研究などの面で指導的な役割を果たしていくことが期待される。
浜田 副部会長	B	引き続き、コロナ禍の影響により中止されたものや、オンラインによる事業もあったが、対面事業や資料貸与が活性化されたことは評価したい。
大久保 委員	B	展覧会への文化財の貸与だけでなく、展覧会運営や文化財の保存・修復、保存環境の向上など、多様な面で国内の美術館・博物館に助言・指導を行っている点が評価できる。
榊原委員	B	毎年同じことを要望する。地方の美術館博物館の展覧会への作品貸与をはじめとする支援・寄与は文化財活用センターのそれも含めて大いに評価するが、さらに大規模な地方への出前展の実現を希望する。地方在住の者には優れた日本の古美術を直接目にする機会はあるようで実は余りないからである。そうした機会を地方の人間が願うのは当然だし、文化財機構もそれに応えたい。
出川委員	B	オンラインで海外の研究者と学術交流を行い、シンポジウムに参加するなど活発な活動を評価いたします。

（６）文化財の積極的な活用による文化財の継承につなげる新たな取組

自己点検評価　B　　部会評価　B

委員名	委員評価	コメント
小松 部会長	B	各館ともそれぞれに新たな取り組みをおこなっているようだが、やはり中心になるのは文化財活用センターの貸与促進事業だろう。令和４年度は６機関が対象になったようだが、これ以外にも多くの地方美術館・博物館との交渉・交流があったと推察される。地方展示施設は、予算面、人員面などで苦境に立たされているところが多く、今後、なんらかの形で支援をおこなっていく必要がある。貸与促進事業は、地方展示施設における展示環境の保全、学芸員の能力向上などの面において資するところが大きいとみられ、今後、この事業のさらなる拡充が期待される。
浜田 副部会長	B	メタデータ整備における「デジタルアーカイブジャパン・アワード」の受賞は、特筆すべき事項と考える。
大久保 委員	B	ColBase に関してはコンテンツの精度とデータ数も当初より格段に向上してきた。ただ、既存の画像データを活用するだけでなく、ColBase 用に収蔵資料の計画的な撮影計画を構築し、公開データ数の拡充を加速させ、欧米の主要博物館の公開データベースの水準に近づける必要もあるだろう。

榊原委員	B	地方の美術館博物館の企画展への作品貸与が行われていることは感謝とともに評価したいが、さらに(5)でも述べたような大規模出前展への取り組みを期待する。古美術鑑賞(受容)の面白さ＝喜びを広く知って貰うためにも是非検討してほしい。
出川委員	B	デジタル化資源を着実に増やして、文化財情報を多方面に発信するなど所期の目標を達成されていると思います。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
小松 部会長	令和４年度もコロナ禍の影響を大きく受けた年だったと思う。各館とも入場者数は通常期をかなり下回っており、経営面からすればかなり逼迫した状況にある。今後は、メディアによる大々的な宣伝のもと、大量の観客を動員するといったビジネスモデルはなかなか成立しがたいのではないか。これから博物館が生き残っていくためにはどうすればいいのか。相対的に恵まれた環境にある機構４館が、この課題に真剣に取り組むことによって、わが国の展示施設全体の底上げに繋がるのではないかと考える。機構４館のさらなる活躍が期待されるところである。
浜田 副部会長	ウクライナ紛争を背景に光熱費が高騰し、博物館運営への財政的圧迫が続いている。利用者である国民に向けた事業や、資料保管のための空調への影響が出ないように、国から十分な財政支援がなされることが肝要である。 また、ウィズコロナの時代を迎え、コロナ禍の中で培ったオンラインやデジタル技術を活用した新たな取り組みは、改正博物館法に加えられた博物館のデジタル化に直結するものである。国立博物館の先進的な取り組みが、全国の博物館の模範となることを期待する。
大久保 委員	社会から求められる多様な要請に対して十分に応えようとしていることには敬意を表したい。ただ、現在の人員・予算のもとで無理が生じていることはないのだろうか。後者は外部予算の獲得なで多少は改善できるであろうが、過重な業務量から個々の研究職員が疲弊し、専門家としての活躍が阻害されることのないよう、普段に目配りをおこなっていただきたい。
榊原委員	評価そのものに係わるコメントではないが、この報告書の評価項目等について各館の報告相互にばらつきがあるようだが、これが文化財機構の報告書として提出されている以上、そうした乱れや認識の違いは正されるべきだろう。各館相互で共通認識のためのすり寄せが必要と思われる。
出川委員	国立文化財機構の博物館は日本の博物館のリーダー的存在として、十分な役割を果たしていますが、特に収集、保管や修復面においては成果をあげられ、また特別展では東博の「国宝展」九博の「北斎展」京博の「茶の湯展」など予想を上回る注目を集める一方、研究を反映した特別展では東博の「六波羅密寺展」、「琉球展」、京博の「観心寺と金剛寺展」奈良博の「大安寺展」九博の「加耶展」などが好感をもてました。展示方法などもふくめ、日本の展覧会活動においても大きな貢献をしていて、全体として所期の目標を達成していると思います。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和４年度－

研究所・センター部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（研究所・センター部会）まとめ

自己点検評価　B　　部会評価　B

２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
（１）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価　B　　部会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	フォーラム「伝統芸能と新型コロナウィルス」の開催（東文研 2121E）などは、時宜を得たものと思われるし、西大寺の発掘調査（奈文研 2132F ｱ-2）で弥勒金堂の位置を突き止めたのも大きな成果と言えよう。
児島 副部会長	B	2111E-2 で昭和 30 年代の写真が現在の修復と復元に役立ったように、研究所の事業は継続することで将来意義を持つ。息長く継続できるようにすることが重要である。また他機関との連携も一層推進してほしい。岸田劉生に関しては東京国立近代美術館で修復の調査結果を発表しているが、こうした知見との連携も試みられるとよいのではないか。
栗本委員	B	有形・無形文化財、文化的景観を対象に、幅広い調査を進められ所期の目標を達成されているものと考えます。無形文化財の保存では、映像記録だけで無く、美術工芸品修理の用具や材料の調査にまで目が向けられていることが重要と感じました。遺跡データベースを公開するとともに潜在的な地震ハザードを「見える化」したこと（2134F ア）や、管理が十分でない膨大な書籍資料の調査と保全（2113F）など、データの継続的な蓄積が進んでいることから、得られた成果の発信と活用を期待します。「林業の文化的景観の特性や保護（2133F）」については、評価書にもう少し具体的な内容の記載をお願いします。
藤井委員	B	③遺跡などの整備において、復元建物の修理について、とりあえず平城宮跡内部で、どのような修理を実施したのか、報告を公表する慣例を確立することが望まれる。全国的に必要とされている情報であるから、ぜひそれを発信して欲しい。

（２）科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価　B　　部会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	ガラス乾板のデジタル画像化に関する技術開発（東文研 2211E）、遺構の露出展示に関する調査研究（奈文研 2229F）など、注目されるところである。
児島 副部会長	B	ガラス乾板のデジタル化や古墳の保存は急がれる内容であり重要な取り組みである。またゲーム化による教育ツールの開発は将来研究者を目指す人材の育成にも役立つ取り組みと思われる。絵画作品の画材分析も重要で、引き続き継続し、公開していただきたい。
栗本委員	B	自己点検評価は昨年の A から B へと低下している。この項目の総体として変化があったとは考えませんが自己点検評価と同じ「B」としました。文化財調査における自動化や省力化手法の開発（2212F）、美術館・博物館の維持管理に掛かる消費エネルギーの把握（2222E）などの進展を期待します。特に 2222E では、調査に留まらず将来的な運営方針にまで提案を広げて欲しい。
藤井委員	B	着実に成果が上がっていると思われる。有効な対策は、なるべく広く発信して、広く共有されることが望ましい。

（３）文化遺産保護に関する国際協働

自己点検評価　A　　部会評価　A

委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	IRCI が中央アジア、小島嶼開発途上国での活動を拡げる（2320G）など、国際協力の進展が見られた点は評価できるが、個別事業毎の評価を総合すると（A＝2、B＝8）、全体としてはＢ評価が妥当だと考える。
児島 副部会長	A	大規模な遺跡修復事業を成功させて成果を出せたことは評価に価する。そうした知見を国際的に発信できたことは重要である。
栗本委員	A	コロナ禍の影響下、オンラインを活用しての活動が多かったと思うが、研修生のフォローアップや研修生同士のネットワーク構築（2313E ア）は、オンラインの特性を上手く使った成果と考える。評価書について、「独自性のある協力」「独自性のある研究発表」の記述など、限られた紙面ではあるが、独自性がどのようなものか？理解しやすいように記載をお願いします。
藤井委員	A	着実に成果が上がっていると思われる。

（４）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

自己点検評価　B　部会評価　A

委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	A	これまでも幅広く活用されてきた、文化財データベースの充実（奈文研 2411F）や、専門的アーカイブの拡充（東文研 2413E）などに加えて、今年創立 70 周年を迎えた奈文研が行った各種の企画展示と図録（2431F）がとても分かりやすく懇切であり、これらの成果を考え合わせると、全体でＡ評価と判断したい。
児島 副部会長	B	黒田清輝《湖畔》の新しいウェッブコンテンツを探すのが難しかった。一般の人が検索したときに出てくる「e 国宝」などからのリンクがあるとよいのではないだろうか。同様のことはおそらく他の情報でもあると思われ、知っていないと見つけられないのではもったいない。Web データを見つけやすくする工夫があるとよいのでは。
栗本委員	A	2431F では、特別展の開催や公式 Twitter での情報発信など、成果が得られているものと考えます。また、他の事業でも目標を上回る成果が得られているものもあり「A」としました。
藤井委員	B	①文化財情報基盤の整備、充実について、重要文化財建造物の修理工事報告書の電子化、WEB 上での公開、重要文化財の図面の電子化、公開を検討すべき時期に来ているのではないか。ぜひ検討して欲しい。

（５）地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

自己点検評価　B　　部会評価　B

委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	昨年度までのコロナ禍の影響が少し下がり、研修・指導助言の件数も増え、対面とオンラインを併用することによって、より幅広い活動が行えるようになったものと思われる。
児島 副部会長	B	安定しておこなわれており、活動の柱の一つとも言える重要な位置をしめ、今後も継続することが必要であろう。
栗本委員	B	専門知識と経験を活かして地方公共団体等への助言や協力、専門職の研修、大学での教育などを通して、所期の目標は達成しているものと考えます。
藤井委員	B	③国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院の復元整備について、主要部である復元建築の復元的考察を詳述した報告書の刊行を実現すべく、働きかけて欲しい。復元建築の高い単価などの根拠となるから。また国内・国際的にその姿の妥当性を説明するための必須の根拠となるから。

（６）文化財防災に関する取組		
自己点検評価　B　　部会評価　B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	地震・火災等の災害時における個別の対応とともに、各地域団体との連携・指導・情報収集・技術開発など、文化財防災センターの広範な活動の様子がうかがえた。次年度以降に、各種のマニュアル・ハンドブック・ガイドラインといった形で結実していくことを期待したい。
児島 副部会長	B	以前よりも運営組織、運営方法が明確化されている点に成果をみることができる。
栗本委員	B	評価委員会において、文化財防災センターの認知度が高まり自治体との連携も増えたなどの説明から、活発な活動をしているものと判断しました。限られた人員や自治体の関心に濃淡がある中で、地域で整備すべき体制の構築やガイドラインの作成など、優先順位をつけて取り組まれることを期待します。
藤井委員	B	①地域防災体制の構築について、事後的でも構わないので、現在文化庁が進めている、全国的な市町村の作成する文化財保存活用地域計画と、密接な協力関係を構築して欲しい。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
寺崎 部会長	全体として、自己評価が前年度よりも「控えめ」になっているように見受けられるが、それでも所期の目的は十分に達成しているものと判断される。 いずれの機関も、限られた人員と予算の中で、しかもコロナ禍の影響が未だ終焉しない環境下で、多方面にわたって大きな成果をあげていることに対し、敬意を表したい。今後も状況が好転するか否かは不透明であるが、引き続き尽力していただきたい。
児島 副部会長	コロナの影響を少しずつ脱してよい成果がみられた。現状の評価項目が適切なのかというご意見が会議で出されていた。研究機構の活動は、地道な研究調査を継続し、その成果を社会還元していくことで実績を上げてきた。その点からは、もとより実行しているはずの「効率性」は果たして評価の重要項目だろうか。例えば他機関や外部研究者との連携は「発展性」に関わる重要な活動であるから「連携性」のような観点があってもよいのではないか。
栗本委員	調査研究と成果の公開、各種の相談業務、専門職の研修・次世代への教育、国内外への情報発信、文化財防災など、大変多くの事業が活発に運営され所期の目標を達成されていることを評価します。コロナ禍の状況にありましたが、オンラインでの打合せや研究会、動画配信などの有用性が明らかになりました。今後もこれらを上手く活用して、限られた人材と予算の中での運営と成果の両立を期待します。 自己点検評価書は概ね明確に書かれていると考えますが、評定理由には具体性に欠ける箇所も認められました。記述の工夫をお願いします。
藤井委員	新型コロナのために、まだ活動が全面的に展開できない点も散見されるのだが、それなりに十分な成果があげられたと考える。2023 年度の事業の進展に大いに期待している。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

委員長	名児耶　　明	（元公益財団法人五島美術館副館長）
副委員長	小　松　大　秀	（公益財団法人永青文庫館長）
委員	大久保　純　一	（国立歴史民俗博物館教授）
委員	小笠原　　直	（監査法人アヴァンティア法人代表 CEO　代表社員　公認会計士）
委員	児　島　　薫	（実践女子大学文学部美学美術史学科教授）
委員	栗　本　康　司	（秋田県立大学木材高度加工研究所教授）
委員	榊　原　　悟	（岡崎市美術博物館特任館長）
委員	坂　本　弘　子	（元朝日新聞社常勤監査役）
委員	出　川　哲　朗	（大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長、大阪大学招聘教授、大阪市博物館機構学芸顧問）
委員	寺　崎　保　広	（奈良大学文学部名誉教授）
委員	浜　田　弘　明	（桜美林大学教授）
委員	藤　井　恵　介	（東京大学名誉教授）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会　博物館部会

部会長	小　松　大　秀	（公益財団法人永青文庫館長）
副部会長	浜　田　弘　明	（桜美林大学教授）
委員	大久保　純　一	（国立歴史民俗博物館教授）
委員	榊　原　　悟	（岡崎市美術博物館特任館長）
委員	出　川　哲　朗	（大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長、大阪大学招聘教授、大阪市博物館機構学芸顧問）

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会　研究所・センター部会

部会長	寺　崎　保　広	（奈良大学文学部名誉教授）
副部会長	児　島　　薫	（実践女子大学文学部美学美術史学科教授）
委員	栗　本　康　司	（秋田県立大学木材高度加工研究所教授）
委員	藤　井　恵　介	（東京大学名誉教授）